

平成23年度第2次札幌新まちづくり計画事業進行調書(その1)

施策体系コード	4-2-1		事業名	北海道の野生動物復元事業
担当	環境局円山動物園経営管理課 内田 Tel 621-1426			
全体計画				
事業内容	希少動物でもあるオオワシやシマフクロウを繁殖し、鷹匠技術を活用して園内で飛行訓練を行い自然界へ放鳥させるまでの一連のプロジェクトをその過程から展示する。		＜年度別の事業内容＞	
			<p>H19 園内ビオトープの実態調査、今後のビオトープ整備計画を検討する協議会の開催、保護した猛禽類の個体の収容小屋の設置、オオワシ放鳥計画の概要の作成</p> <p>H20 オオワシ野生復帰会議開催 繁殖ケージ、トレーニングケージ、一時保管庫等の設計 ビオトープエリアの造成、環境整備</p> <p>H21 繁殖ケージ、トレーニングケージ、一時保管庫等の建設 オオワシの繁殖、飛行訓練の実施 産学官、市民参加によるビオトープ運営開始</p> <p>H22 オオワシ繁殖・放鳥</p>	
事業内容・量・場所・規模・件数等	平成19年度事業内容(決算)		平成20年度事業内容(決算)	
	<p>●野生動物復元事業(6,382千円)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在飼育する猛禽類の保護小屋 2棟(W3600mmD1800mm H2300mm)ボイラー機械室横に設置 ・オオワシ放鳥基本計画策定のための調査業務委託の実施 1件 ・事業関係機関への視察等調査(サハリン) 1回 		<p>●野生復帰ゾーン整備(9,888千円、場所:園内旧シカ・トナカイ舎横)</p> <ul style="list-style-type: none"> ーオオワシ・シマフクロウの繁殖、放鳥のための施設建設工事実施施設設計 <ul style="list-style-type: none"> ・繁殖ケージ(2棟)の建設工事設計 ・一時保管庫、作業室建設工事設計 ・トレーニングケージ(金網の大型鳥かご)1棟建設工事設計 <p>●自然体験ゾーン整備(92,176千円、場所:園内こども動物園と円山川の間のエリア)</p> <ul style="list-style-type: none"> ー園内ビオトープエリアの造成工事 ービオトープセンター(レクチャー小屋)の建設 	
	平成21年度事業内容(決算)		平成22年度事業内容(決算)	
	<p>●野生復帰ゾーン整備(162,332千円)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・繁殖ケージ(2棟)の建設 ・一時保管庫、作業室(各1棟)建設 ・トレーニングケージ1棟建設 <p>●日ロオオワシ野生復帰プロジェクト(2,760千円)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サハリンにて野生復帰会議開催、野生復帰計画検討、繁殖地視察 		<p>●野生動物復元事業(396千円)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オオワシ研究者との協議(釧路市) ・環境省へ野生復帰計画・施設運営に係る報告・協議 ・日本動物園水族館協会種の保存委員会協議 ・猛禽類野生復帰施設運営開始 <p>(展示サイン作成、オオワシつがい搬入、関係機関からの保護猛禽類の導入、提携大学との野生復帰訓練共同調査、園内での市民啓発(施設見学会実施及びサンデーセミナーでの事業紹介))</p>	

平成23年度第2次札幌新まちづくり計画事業進行調書(その2)

施策体系コード	4-2-1		事業名	北海道の野生動物復元事業		
達成目標の状況						
項目	18年度末 (現状)	19年度末 (実績)	20年度末 (実績)	21年度末 (実績)	22年度末 (実績)	22年度末 (目標)
オオワシ、シマフクロウの繁殖数	－	－	－	－	0羽	3羽
オオワシ、シマフクロウの放鳥数	－	－	－	－	0羽	3羽
市民・企業等との協働の状況(市民・企業等の参加、支援、協力の状況)						
<p>■市民との連携、市民参加 ビオトープ整備に際しては、市民及び有識者から成るビオトープ協議会を設置し、協働して調査、計画検討を実施した。(会議開催6回、参加者公募による観察会等2回) H22年度は、H21年度から継続しているガイドツアーに加え、クイズラリー等の公開型イベントを実施。いずれも市民ボランティアとの企画・運営の下、実施した。</p> <p>■企業等との連携・協働 [資金協力] 該当なし [人材協力] ビオトープの運営にボランティアの参加を促進する。 [情報協力] 該当なし [その他の協力] 該当なし</p> <p>■市民・企業等が参加しやすい環境づくり 該当なし</p>						
評価(成果)			課題			
<p>●H19年度 野生動物復元事業に付随する傷病鳥獣などの受入準備のため、猛禽類の保護小屋の設置を行った。これにより、収容場所の拡大によりオオワシ・シマフクロウを始めとする猛禽類の保護が可能となり、オオワシプログラムの一部準備が整った。 また、H20年度からの園内ビオトープ整備にあたり、実態調査を市民参加も含めながら実施した。</p> <p>●H20年度 ホッキョクグマ出産のため訓練用・飛行訓練用・繁殖小屋の建設工事を延期したため、平成21年度への事業繰越となったが、実施設計までを終えることができた。 自然体験ゾーンの整備は、3月に完了し、4月からの一般公開(土日祝日のみ)に向けた環境整備を行うことが出来た。また、造成前に観察会を市民参加者を含め開催した。</p> <p>●H21年度 4月 自然体験ゾーンにて、「動物園の森観察会」を一般公開開始 5月 動物園の森運営補助業務委託</p> <p>●H22年度 9月 保護個体収容及び訓練開始 9月 オオワシペアリング開始 9月 自然体験クイズラリー実施 9月 猛禽類野生復帰施設(非公開施設)紹介のための施設見学会開始 11月 動物園の森運営補助業務委託</p>			<p>○猛禽類野生復帰の実績を数多く積みむとともに、並行してオオワシプログラムに向けた繁殖や、猛禽類の繁殖に関する調査研究を行い種の保存に寄与するための準備を進める。 オオワシの野生復帰については、環境省、動物園関係者等(種の保存委員会)との調整を図り、また学識経験者の意見を広く聴取して、方法論の検討を行う必要がある。 なお、ロシア当局から日本政府からの正式な外交経路を通じての申し出を求められている。平成23年4月に開催された、日露渡り鳥条約会議においては、日本側(環境省)から当園の取組に関する情報提供がなされた。</p> <p>○自然体験ゾーンの運営について、市民による運営を促進するための計画策定が課題である。公開の形式については、安全性や植生保護などの条件を検証した上で定員を定めたガイド型公開以外にも、広く公開できる方法を検討していくことが求められる。</p>			
今後の事業の予定・方向						
<p>○猛禽類の野生復帰センターとして、保護個体の訓練及び放鳥を行うとともに、猛禽類繁殖の調査研究や、生息域外保全に関する基本方針に基づき、種の保存に寄与していく。繁殖に係る調査研究に向け、繁殖小屋の増設が必要となるため、検討していく。 また、園内ビオトープを活用した事業は市民・団体参加を促進し、自主的で低廉な事業コストでの運営を目指していく。</p> <p>○平成23年度は、ビオトープ運営管理を担う市民ボランティアの追加募集を実施する予定である。</p>						

平成23年度第2次札幌新まちづくり計画事業進行調書(その3) (単位:千円)

施策体系コード		4-2-1		事業名	北海道の野生動物復元事業		
事業費の推移							
項目		19年度	20年度	21年度	22年度	計	
計画	事業費	40,215	575,465	55,320	0	671,000	
	財源内訳						
	国・道支出金	0	0	0	0	0	
	市の債	0	378,000	0	0	378,000	
予算	事業費	15,000	297,000	181,691	3,043	496,734	
	財源内訳						
	国・道支出金	0	0	0	0	0	
	市の債	0	207,000	127,000	0	334,000	
実績	事業費	6,382	102,064	162,332	396	271,174	
	財源内訳						
	国・道支出金	0	0	0	0	0	
	市の債	0	6,000	127,000	0	133,000	
事業費の進捗率		(H19実績+H20実績+H21実績+H22実績) / (計画事業費)				40.4%	
計画との差異(予算・実績・事業内容・規模・時期等)							
《全体》							
[19年度] ビオトープの整備による自然環境プログラムの調査研究費や野生復元プロジェクトにスポットを当てた夏休み特別展示イベント、またビオトープの造成について予算計上していたが、造成についてはビオトープ協議会や市民参加による観察会を通して寄せられた意見・提案により造成費の見直しが必要となり、平成20年度予算内での執行へと変更し未執行となったため、約8,600千円の不用額が生じた。なお、この不用額は動物園の経常経費における燃料費高騰による支出超過に充てられた。							
[20年度] 本市財政状況を踏まえた事業計画の見直しを行い、当初計画した施設の機能・時期を大きく変更しない範囲での事業予算計上となった。 野生復帰ゾーンの整備は、ホッキョクグマの出産準備のためH21年度へ繰り越し、野生動物復元事業は、動物園の経常経費を節約し「オオワシ野生復帰会議」の開催費へ充当し執行した。							
[21年度] 計画との差異は、飛行訓練ケージ等の建設を繰越したためである。							
[22年度] 野生復帰施設の運営(訓練及び繁殖目的での飼育)を本格的に開始した。 なお、年度当初時点で海外での放鳥個体計画はなく、平成22年度自治体国際協力促進事業(モデル事業)の承認の廃止申請を行った。							